

彼が生れしより春秋こゝに十有九。彼が京師に至れるとき、時勢は如何に變じたるか。請ふ之を文
章に説かん。

文苑

亡友を思ふ詞

皎々子

おのれ親しき友ひとりありけり、同郷にて、幼きよりたなじく、東の都に學びしが、友
なる人、平安のある學校にと、志ざして、わかれぬ、その後、おのれも、難波津にさすらふ
身となりしが、互にゆきかひて、あるは、淀川の月に、思をのべ、あるは、嵐山の花に、情を
やるほどに、おのれまた、北のはて、西の隅とさまよひありきて、まばしがり間相見ること
ども、叶はざりしが、この春博覽會見むとて、平安に入りければ、まづ友なる人を訪ひ
て、四日の間、袂を連ねて、名所靈境を探り、夜々夜の明くるも知らず、物がたりしつゝ、
再逢を契て、別れにき、さて、この夏、歸省せしかば、ひたすら友の歸り來る日を待ちけ
るに、九月より試験あれば、この度は、え歸らずと、いひおこせぬれば、空しく熊本に歸
りぬ、さて、その成業の報を、今も待てども、音信たに、なし、如何にしけむと、文を送り
しに、その夕つかた、國許より、病を得て、歸り來れりとの報、來りぬ、翌くる日、やがて文
認めて、その様を、問ひやりしに、脚氣より肺病に移り、遂にみまかりにきと、返りこと
きぬ、再び送りし文は、一つだに、その手に入らず、亡せたるなりけり、あはれ、斯とだ

全幅を收拾して洩
さす
錦着の字上文の成
業の字を顧る

に、知らばこの春、今暫し共に暮すべきものをと、歎けども、かひなし、淀川の月、永久かはるることなく、嵐山の花、年々盡くることなし、人のはかなきなどしも、こゝに至るや、おのれさへ夢見るばかりなるを、まして、その両親の歎き、いかにといはんも、おろかなり、あはれ最愛の兒の錦着て、歸らん日を、數まへ給ひつるに、あさましや、かたみの骨を迎へ給ひつらん、悲しき事のかぎりなりかし。

舟くらべ 十首

敲月樓あるじ

○ 畫津の湖の沖の嶋根の旗風に今日は千鳥も起ち騒くなり
○ 名にし負ふ立田花岡金峰きんぼくてふ底の青黄あきに赤あかの曾保船
もやひする中にも脚の留らぬは心先たつ習なるらむ
里の子ら來てみよ今日は益良雄か眞權まごえぬき舟競せり
二手舟心一つに漕行くも任せぬ者ハ權ごんにそあるらし
漂へる雲居の底を一つらに飛たちかへる鴈のはや舟
羨まし湧立聲の中わけて挂くるめたるの影のまはゆさ
○ 端艇のきはふも國のいさはひと言の葉にさへ知られやはせぬ
沖つ藻の亂るゝ世にも甲斐あれと競へにくらへ益良雄の伴
舟競はてし浦回の鴉鳥もあはれ浮巢のたち競せり